



ピノコパパのエッ
セイ集から



善通寺さんの謎

pinokopapa

善通寺さんは、昔、私の遊び場でした

子供のころ、善通寺の境内を 伽藍 - がらん と呼んでおりました。しかし今もそう呼ばれているのかどうか、わかりません。

通常、善通寺市民は、善通寺といえば善通寺市を指していると思い、お寺のことだとは思いません。じゃお寺の地名は何かというと、それが昔は「がらん」だったのです。そして寺の呼称、名称は「おだいっさん」でありました。ですから子供の時分には、おだいっさんに行ってくるわ、がらんであそんでるわ、と言っておりました。

そのおだいっさんに最近、朝五時ごろから歩いてゆきます。片道約1.2Km、往復で役5000歩。これを毎朝続けております。すると、善通寺の御影堂で、寺内に泊まったお遍路さんたちが朝の勤行しておりました。本堂中央に座主が居座し、横に四人ほど僧侶が立って、皆で般若心経を唱和します。そのあと参列者を金剛錫杖でお祓いして回ります。私たち一般参詣人は、外で頭を垂れているばかりでお祓いはしてくれません。残念。毎日お賽銭をあげているんですが。

謎だらけの善通寺 -

善通寺は東西に東院、西院と分かれております。その東院境内の五重塔の向こうになにやらお堂がたっております、そしてそのわきに、子供が砂場で作った塔のようなものもたっております。これが最初のなぞです。

五重塔の南東に立っている二つの塔、これは法然上人逆修之塔と足利尊氏の利生塔です。つまり、大変な謂れの塔なんです、東院は五重塔に比べて、あまりにもひっそりと立っているお堂とその二つの石塔は、八十八カ所参りツアーのガイドさんも近寄らず、案内もしないで素通りします。たぶんそれで当然なんでしょう。元からの善通寺住民である私でさえ、知らなかったのですから。しかしここは、いつも掃き清められ、整えられています。お堂の方は、法然上人の逆修之塔が安置されています。もう一つの、むき出しの石塔は利生塔と言われるもので、足利尊氏が応仁の乱で犠牲になった敵味方、そして戦火で亡くなった庶民を悼んで各地に建てた慰霊塔なのです。それにしても、利生塔という看板がなければ、ただのふるびてぼろぼろの、くずれかけた石積みのモニュメントにしかみえません。

しかし、この善通寺は、平安末期から鎌倉時代では、日本随一のパワースポットでありました。やはり、お大師さん生誕の地であったからで、当時のお大師さん信仰ブームの賜物でした。しかし、いまは地方のちょっと大きいお寺程度で、札所の一つ、遍路の通過点になりはてました。

応時の熱狂を偲ばせるものがあります。三帝御廟というものです。これは、実際にはその在り場所を転々と移して来たものですが、いまはここに三基の石塔が並んでひっそりと佇んでいます。三帝御廟は後嵯峨天皇、亀山天皇、後宇多天皇の御爪髪が納められているそうです。

法然上人の逆修之塔については、建永の法難、または承元の法難とも言う事件があり、そのことから法然上人、親鸞ら専修念仏を唱える教団が後鳥羽上皇の怒りをかい、法然上人は高知へ流罪、親鸞は新潟へ流されることになりました。

この事件は、法然上人の教えに端をはっします。法然上人の専修念仏の出現は日本仏教の根底をくつがえす大変革であり、奈良仏教、平安仏教からの脱却でありました。それ故、後の親鸞さんも法然さんには付いて行けないとおもったことがあったようで、それは何かというと女犯を禁じず、妻帯を推奨したことにありました。また、法然さんは女人も念仏すれば救われると、堂々と講じました。そうした教えに従って、後に親鸞さんは妻をめとり、子供にも恵まれたはずです。そんなことが持って回って、御所の女官二人が法然さんの説教を聞きに来て、若い僧侶と、と言うことになり、このことを知った後鳥羽上皇が激怒して、僧侶二人は死刑、法然さんは高知へ、親鸞さんは新潟へ流刑、あと何人かの高僧も散り散りに流されました。これが建永の法難です。ところが法然さんについては、この人を庇護する人があって、高知の果てへではなく、琴平のお寺にとどまることを許されました。その庇護した人と言うのが九条氏で、その頃の讃岐の守でありました。あの後鳥羽上皇さんに口の聞けたのですから、なかなかの有力者ということになります。そうした経緯から法然さんは琴平に滞在することになり、ならばこの際善通寺にお参りしようと度々参詣されました。その事から逆修之塔が建てられたということです。しかし、この上人さんの説いたことが、後に織田信長や家康を苦しめた一向一揆につながり、結果として本願寺の東西への分離となっていったかと思うと、糸のような源流が末では大河になるのを見る思いがします。

その逆修之塔に比べ、足利尊氏さんの利生塔は殆どほったらかしの状態で、塔を囲うお堂も建てられず、雨風に晒された五重の石塔として、風化した姿で立っています。これは、先に少し触れた通り、足利尊氏さんが弟直義さんに命じて、南北朝の戦乱の戦没者を慰霊するため、全国に安国寺を建てさせました。その象徴としての利生塔に、既存の善通寺の五重塔が指定されました。後にこの五重塔は戦火に焼かれたので、それが再建されるまでの形見として、この利生塔は建てられたのだそうです。このように、やはり足利の時代でも大師信仰は大変なもので、都から離れたこの地の善通寺は、足利幕府の大変な庇護のもとに、大いに栄えました。真言宗は東寺、高野山だけではありません。善通寺だって、大変なものでした。

謎だらけの善通寺 二

西院にうつります。

西院には親鸞堂があります。大きなお堂で、東院の釈迦堂よりまだ大きそうです。今比べた釈迦堂ですが、元は西院にあった御影堂でありました。今の御影堂は荘厳で厳めしいほどの大きさですが、これは後に再建立されたものです。

さて、その前に、善通寺の御本尊さんは何か、ご存知ですか。東院伽藍の金堂に鎮座されますお薬師さんです。ですから、案内図のなかには金堂を本堂と書いているものも見かけます。この金堂の前に大きな手洗い石が置かれています。大きな石、大石、そうなんです。この石は大石内

蔵助さんが奉納されたものなんです。この石は現在の場所に最初からあったのではなく、参道を挟んで反対側に置かれていました。あの大石さんが奉納したものですから、よく手を洗ってください。それから、正月の初詣に向かわれる方は、西院の善通寺で一番大きいお堂である御影堂に何の疑いも抱かず詣でますが、そこに本尊さんはいませんよ。金堂にいる御本尊のお薬師さんを忘れないでお参りください。そういえば、釈迦堂はもっと冷遇されているのかなあ。あんまりお参りしませんねえ。仏教はお釈迦様が始められたのに、です。しかし真言密教は一般の日本仏教とは別ものという解釈もあります。つまり普通の仏教とは異質なものとされているのです。そこに釈迦堂がある。これも普通に見逃せば疑いさえ起らない当然のことですが、謎といえば謎です。

大石内蔵助さんの大石、釈迦堂、まあ一応お釈迦さんも奉っておこうかと言う感じなど、謎だらけですが、密教の異質なことも、今は見過ごされている謎なんです。密教は他と変わらない仏教の一派ぐらいの認識です。だからでしょうか、この寺には山伏さんがお参りになってます。たまに、山伏さんの法螺貝が金堂の前で鳴り響きます。また、手を色々に組んで九字を切るのも真言宗の印を結ぶところから、山伏さんの所作に移りました。それに、般若心経を山伏さんはよくとなえます。この山伏信仰の流れで、戦国の忍者さんも何処かへ忍び込むときは、この九字を切って邪を祓い、心を落ち着かせたそうです。

話が横道に逸れたついでですから、もう少し続けます。

この東院、つまり伽藍にはこのほかに龍神社が祭られています。金堂に向かって左、経堂の奥に小さな池があり、その池の中に龍神様の小さな社殿があります。以前も龍神神社が讃岐にはたくさんあると書いたことがあります。お大師さんは雨乞い祈禱が大変得意でありました。その雨乞いの逸話の中でも一番有名なものが、宮中の神泉苑の守敏との雨乞い対決でしょう。

これは、守敏が竜王たちを閉じ込め、雨を降らせぬようにお大師さんのご祈禱を邪魔していたのですが、お大師さんが一番位の高い善女竜王を神泉苑に招来して、三日三晩大雨をふらせることに成功したというものです。そして、それを逆恨みに恨んだ守敏がお大師さんを調伏しようとしたけれど、お大師さんがその調伏を跳ね返し、守敏は血を噴き出して死んでしまったといえます。なんとなく後味の悪い話です。ところが異説もあって、お大師さんの弟子が、お大師さんにご祈禱しましょうと言っても、お大師さんは空をにらんで未だ早いと何日も祈禱をしませんでした。しかしある時、はたと空をにらみ、この時だと17日目に祈禱を始めたたん、大雨が降ったということです。こっちのほうがお大師さんらしいです。お大師さんはきっとお天気が読めたんですよ。

実は、東院にはもう二社、神社があります。一つが五社明神。もう一つが天神社。五社明神には、雲気大明神、大歳大明神、大麻大明神、広浜大明神、蕪津大明神が二字の相殿に祀られています。これは、もともとは善通寺を建立する前にこの地の氏神様にお鎮まりいただいて、そのあと善通寺建立のお許しをいただくために祈ったのでした。そしてそのあとは、寺領安穩を祈りました。ですから、元日にはまず一番に善通寺の僧侶全員がうち並んで参拝します。奈良のお寺でも同様のことを見た覚えがあるのですが、各地で同様のことは行われているようです。

さて西院の話です。

中門をくぐり、東院を離れて仁王門を入ると西院となるのですが、その参道に華蔵院と観智院の二寺があります。善通寺自身には、かつて僧坊が49ありましたが、現在は塔頭寺院としてこの中門から仁王門までの参道にある観智院、華蔵院、そして南町3丁目の玉泉院、仙遊寺があるだけになりました。それだけ、修行僧が集まってきていたということです。ちなみに、金堂裏の空き地は、かつて修行のための相当大的な講堂が建っていたそうで、それが火事で消失してしまい、再建されないままになってしまったのでした。また、仙遊寺も、先だって訪ねてみると、ユンボやなにかが置いてあって、かつてのお堂はもう無くなって、いまは味気ない石組の懸がいが囲んだお堂があるばかりです。

玉泉院は西行庵とも言い伝えられており、玉の泉が残っています。出釈迦寺の向こうにも西行庵はありますが、たぶん昔の事ですから、あちこちに西行さんも住んだのではないのでしょうか。

仁王門をくぐると、門の裏側におおわらじが左右一足立てて飾られています。仁王さんのわらじでしょうか。謂れを紹介していないので解りません。おおわらじは他のお寺にも沢山奉納されていますので、それなりの由来もあるものと思います。一つには脚の痛いのを、仁王さんのわらじにあやかって直してもらいたいという願いが込められているということがあったそうです。しかし、善通寺の大わらじは触ることもできません。触って、私の膝の痛いのも直してもらいたい。

仁王門から御影堂までは、これも珍しい、屋根付きの参道になっています。屋根付きの橋も珍しいが、これも珍しい。私など、昔からあるので当たり前としか思っておりませんでした。そうでもないみたいです。他の寺院にも回廊にはもちろん屋根がありますが、参道までは、他に見たことがありません。これも謎のひとつです。実を言うと、これと他にもう一件、お札を売っているおばさんに訊ねてみたことがありました。しかし、首をひねって反対側のお坊さんのいるほうに訊ねてみてくれと言うのです。で、聞いてみました。しかし、若いお坊さんでは答えられず、中年のお坊さんが来ましたが、これも申し訳なさそうにして、存じ上げませんというばかりでした。もう一件も、やはりわかりませんとのことでした。謎だらけです。

その、もう一件の質問の前に、親鸞堂のことをのべておきましょう。御影堂に向かって右に納経所があり、その向こうに親鸞堂があります。真言宗の総本山に親鸞さん？それも、親鸞さんの師匠である法然さんは石塔と、雨をしのぐほどの小さなお堂で、弟子の親鸞さんの方は大きなお堂ってどうなんでしょうねと、ついひがみ根性で考えてしまいます。ここには立札があり、関東を巡っていた親鸞さんが、師匠の法然さんはお参りできた善通寺に私は行けないので、せめて木像だけでも送ってくれと信者さん夫婦に託したそうなんです。これを鎌田の御影というそうです。よほど善通寺に参りたかったんでしょう。

さて、この親鸞堂と護摩堂を繋ぐ渡り廊下の一隅に、押しこめられたように閻魔さんとその一党が並んでいます。閻魔堂と一応は言いますが、どうもついでに祭ってあるようにしかみえませんが、そういうと、何にも知らんやつがと邏卒どもに叱られそうです。この閻魔さんの事がもう一つの質問でした。なんであそこに閻魔さんを祭っているんですか？博識そうな、眼鏡を掛けたお坊さんが、昔からあそこに祭られておりますが、謂れの方は存じ上げませんと申し訳なさそうに言うばかりでした。確かに、お寺に地獄はつきものですけど、真言宗に地獄はどうなんです

よう。地獄思想は、他力本願の浄土宗系の宗派がひろまってゆく方便にひろめたものです。しかし、何もかも包み込んで、何の違和感も持たず、人々の心の拠り所となってきたのが、善通寺です。

さらに、その回廊の前にほやけ地蔵尊の地蔵堂があるのですが、ほやけは頬やけで、顔にあざのある娘さんがそのあざを直してくださいと毎日お参りすると、娘さんのあざは直って、かわりにお地蔵さんの左頬に焼けたような影ができたそうです。以来、このお地蔵さんには頬やけ、あざ、病氣平癒を願う人の信仰を集めているそうです。しかし、地獄の閻魔さんの前にお地蔵さんとは、当を得た配置ではあると、このど素人は思っています。お地蔵さんは、地獄に落とされた亡者を救い上げてくださる仏様です。

他にも善通寺には御影の池とか、御影の松とかありますが、残念でならないことが一つあります。産湯井のお堂が御影堂の東にあるのですが、そこへ行く途中に垣根があり、これは今参拝できないみたいです。産湯井はその名の通り、お大師さんが産湯をつかった時の井戸の事です。善く通る寺なんて言わずに、この少子化の時代のなか、子供が欲しくて不妊治療までしている女の人が多々いるのですから、これほどのパワースポット、公開して子授けのご利益を頂けるようにしていただきたいと思います。

後記

これは私の誤解で、御影堂の胎内巡りと宝物館参拝のチケットを買えば、この産湯井も参拝できるそうです。

残った謎のこと

善通寺の西院は誕生院とも言います。その西院に開かずの門があります。勅使門です。菊のご紋が入った、少し扉も今は傾いた小ぶりの門です。かつては朝廷の勅使がこのご門を入ってきたのでしょう。西院が誕生院と言われるのは、もちろん弘法大師さんがここでお生まれになったからですが、佐伯善通、玉依御前夫婦はお大師さんが唐より帰ったのちは京に移られたそうなので、その住居跡を西院として建立されました。

お寺は門を入ろうとすると、橋が架かっていることが多いです。それがたとえ川はなくとも、溝に橋をかけてそれと模して川があることにしています。その橋の下を流れる川は三途の川なんです。寺の門の前に川を配して、それでもって結界を張り、寺の内を別世界にしています。ですから、寺門をくぐり、石の橋を渡るときは、心して渡りましょう。

密教はインドに始まり、中国にその正統が移って、お大師さんがそれを継ぎました。ところが、インドでも中国でも密教は滅んでしまって、唯一この日本にのみ残りました。こんなことって、日本には沢山ありますよね。そう思うと日本って世界の東の端の、それも果ての果てなんだと

つくづく思います。

東院の五重塔は、相当古いもんだと思っていませんか。法隆寺じゃないので、今の五重塔が完成したのは、実は明治なんです。1887年、つまり明治17年に完成しました。この五重塔の高さは全国で3番目です。では一番はと言うと、それは東寺の五重塔、つぎは奈良の建仁寺です。都でもなかった、名もない片田舎の地の果てにしては頑張っているでしょう。今では善通寺って琴平の隣なんですと言わなければ解らないほどなのですが。

善通寺さんと関係ない謎です

旧地名鎌倉町にある、鎌倉神社の鎌倉権五郎さんは、目を矢で射られたため、眼病の神様になりました。それゆえか、その所縁の景正神社近くの出水には、「ごんごろさん」の片目の鯉が泳いでるそうです。

まさか善通寺さんの案内のようなことを書こうとは思っていなかったのですが、私の知っていることの大かたを書き連ねてしまいました。しかし、こんなことを書き始めたきっかけは、その日もお参りした帰りに、赤門の前の案内板の前で、金髪で思いっきり腹の出っ張った髭の白人と、この寒さの中夏のような白さの服を着た帽子の女性が、

年配の女の人の指差す先を見かけたからでした。その年配の女性の説明する言葉が、いかにも聞き取りやすい、母音のはっきりしたよくわかるフランス語でありました。つい、そのことに感銘を受け、強く意識に残ったことが始まりだったのです。このど田舎の善通寺に、フランス語で案内のできる人が来ているんです。そのことからもう一度善通寺さんを見直してみて、昔から疑問に思っていたことを追ってみようと思いました。803年に建て始め、817年に落成したこの善通寺です。八十八カ所も開闢1200年です。これだけの年月を積み重ねたお寺ですから、私など、太刀打ちできるものではありませんが、すこし理解出来たかと思っています。あのフランス語のご夫人に負けないようにしなくっちゃと思っています。

総本山善通寺の正式名称は、真言宗善通寺派総本山、屏風浦五岳山誕生院です。このなんとか山の号に、善通寺は五岳山としています。寺の裏の西駐車場と道を挟んですぐにあるのが、五岳山で一番低い香色山(こうしきざん)です。標高は157m。七曲がりの登山道を上がって降りるのに約四〇分。さほど高くない、丘程度の山です。ですから、これを毎日上る人が引きも絶えません。朝早くから上る人も多く、誰にも会わないということはありませんでした。私もこの三月から毎日上がることにしてきました。すると、大体同時刻だと、ほぼ毎日同じメンバーと出会います。両手にトレッキングポールを持ったお年寄りが、山のふもとのいちばん苦しい坂を、二段まで上がってこられるのに出会います。登山道はよく整備され、そこここにベンチが置かれていますので、そのお年寄りには三段目の坂の長椅子に腰掛け、休めたらまた下ってゆきます。そろりそろり、まるで蝸牛のように山を上がり、おります。それがこのお方の健康法。すごいと思っています。

かと思うと、竹の杖を突いた老女さんが、途中のショートカットの石段を健脚にも上がってきて、頂上で片足立ちとか深呼吸とかの、なにか特別な体操をして帰ります。雨の日だって上半身、Tシャツをお腹のところだけまくり上げて、坂道を走って上がる強者の中年男性もいます。この人は日に二回登頂してきます。走るだけでも大変なのに、それを二回繰り返すのは、多分何か目的があるのだと思っています。たとえば、一番わかりやすいのがマラソン出場のため。そんな目的をもった山歩きであれば、女性が二人、汗をふきふき、上がっているのも見かけます。その人たちはダイエットのためなんでしょう。私も健康とダイエットのためですから。

登山道は下から全長1080mですから、距離は大したことはありません。それを黙々と上がります。雨の日だって上がります。走って上がる人は、今日は片手に傘をさして上がっています。私は追い抜かれました。そしてもう少しで山頂というところで、もう降りてくるのにすれ違いました。走って上がる人はまだいます。背の高い高校生と、女性も混じった集団です。この人たちは一目で自衛隊員とわかります。あの体力で、東北大震災にも出動してくれたのだと思います。高校生はなにか競技のためと見えました。たぶん陸上競技ではなく、野球だと思います。がんばれ若造！

私は東から香色山へ向かいますので、昔の繁華街、いや商店街の赤門筋を通って行きます。今町はきれいに整備されました。車道は車がすれ違うにはちょっと狭く、歩道は人が横に並んで歩いても、すれ違う人をよけて通れるほど広く整備されました。植物にはとんと疎いので、街並みに似合う街路樹が何て名前かわかりませんが、もう蒸し暑くなるこの梅雨のうっとうしさを忘れさせてくれる広葉樹が植えられています。それをなお整えてほっとさせてくれるのが、丸い頭の石の灯りです。明日、その写真を撮って載せようと思っていますが、雨が降りますからどうなるやら。しかし、間隔を持って並んで置かれた石の灯りが、まるで地蔵さんのような感じに見えてなごむのです。そして、その石を中心に、それぞれが趣向を凝らし、さりどて飾り立てるのではなく、さりげなく緑をあしらい、その時期に咲く花が花を付けています。もうシャッターばかりがめだつ商店街の、それぞれの店先に、少しの花園が並んでいます。もうあの時のように、見る人が右往左往して通ることもない歩道を飾っています。

その一つの花園の、石の灯りの頭の上に瀬戸物のフクロウが立っています。電柱が立ち、石の灯りが並んでいて、その頭に、風が吹いても、嵐が来ても、落ちたりもせず、そこにいます。ときどき、たまに、フクロウの向きが変わっていることもありますが、もう私が気付く前からそこにあって、なくなりもしません。みかけると、つい声をかけたくなりますが、愛らしいもんです。

香川県は自然災害の少ないところですが、それゆえか、四国四県の中でも、自己中心的な県民性といわれています。お遍路さんへのお接待も、他と比べれば少ないと聞いています。ですから、私はお遍路さんを見かけると、必ず挨拶だけはするようにしています。日ごろお接待のための用意をしていないので、せめてのことと思うからです。

やっと写真を撮ってきました。赤門筋の、特に西側の商店街の歩道に設えられた花壇の映像です。下の写真が一番シンプルな形をしていました。



電柱に石の灯りです。頭の丸い石灯りです。中に電球が入っていて、夜は点灯するはずですが、残念ながら、よい子は夜遊びをしませんので、見ておりません。たぶん、点灯すると夜の闇にほのかに光り、ほっとする風景だと思います。



今の季節ですから、紫陽花が見られます。ついで、写真の中に一人用の腰掛が写っているのですが、葉に埋まってわかりにくくなっています。



赤門筋商店街の西側に善通寺市立郷土館があり、上の写真はその正面を撮ったものです。見たとおり、赤い郵便ポストが立っており、合羽のようなものまで巻いています。郵便物を入れる上面のところは、まるで学生帽を被っているようで、全体に愛嬌の増したようすがほほえましくみえます。この郷土館には、一階に有岡古墳群から出土した副葬品、二階は民俗資料が展示されています。小さな市の小さな展示館です。無料ですから気軽に見学できます。それはそうとして、長椅子のベンチが木陰にあり、ちょっとしたごめる空間を作っています。



そして、この写真にある通り、これらの花壇は赤門筋レディースクラブがお世話されているようです。まあ昔で言えば、婦人会、またはおかみさん会といったところでしょう。

うか。

しかし、今はもうこの道筋を通る人もまばらで、ここまで管理されている花壇も見る人がおりません。それなのに、季節が来れば、そこそこに花をつけ、咲いて見せます。その後ろはシャッターの閉まった店ばかり。開けている店は年寄りがやっていて、来る客もおらず、店主も客を期待してない風に見えます。毎日この閉まった商店街を歩いて香色山に向かいます。昔はよかったとは思いません。昔の賑わいも覚えてはおりますが、それも今は昔。この静けさも、私は好きです。

